

特別優秀賞

私と近所のおばあさん

青森県 切田中学校 三年
原田 実來

私の家の近所に、人と話すことが好きなおばあさんが一人暮らしをしています。おそらく、彼女は私のことを認識していません。何度もあいさつをかわしたことはあるのですが、その度にニカッといい笑顔で、「何年生?」と尋ねられるのですから。

けれども私は、もう三年ほど前から彼女が好きで、感謝もしています。そのきっかけは、たぶん彼女にとってはほんのささいなことですが、私にとっては何年も心に残っている大きなことです。

私が小学六年生になったばかりの春、下校中にそのおばあさんの家の前を通ったときです。道路の真ん中に大きなカラスがいました。私は固まって動けなくなってしまいました。なぜなら、私はカラスが大の苦手だからです。電柱にとまったカラスの下を通るのさえ、勇気がいります。カラスは私と目が合ったけれど、逃げる様子もなく、どっしり構えていました。私は涙目でカラスをにらみつけながらも、頭の中が真っ白になっていました。

そのときです。当時は存在すら知らなかったあのおばあさんが、「どしたの?」と声をかけてくれたのです。涙目で「カラスが……」と訴えると、「じゃあ、いっしょに歩いてあげるよ。」とついてきてくれたのです。私は本当に救われた気分でした。どうしたらいいかわからなかったので、おばあさんが助けてくれなかったら、おそらくカラスがいなくなるまで30分も、1時間も立ち往生していたと思います。

おばあさんにお礼を伝えると、彼女はニカッと笑って、「なんも、なんも。」と言って去っていきました。このときから、彼女は私のスターです。本当に嬉しくて、夕飯のときに、両親にこのできごとを語ったのはもちろん、学校の先生に提出する日記にも書いたぐらいです。今もまだ、そのときの感謝の気持ちは色あせずに残っています。

さて、私はこの夏休み、あることに気がつきました。そのおばあさんは朝から暗くなるまで、ほぼずっと外にいて道行く人に声をかけていたのです。一人暮らしだから話し相手がないのではないかと、私なりに推測し、夕方に声をかけてみました。

すると、彼女はまたニカッと笑って学年を尋ねてきたので、私は学校のことなどをたくさん話しました。15分ほど経って話が一区切りすると、彼女は笑って「ありがとさん。することなくて暇だったのさ。」と言いました。本当に嬉しそうに言うので、私もとても嬉しくなりました。三年前の恩返しができただかな、と。

相手が覚えていなくたっていいのです。大事なことは相手を喜ばせること。それで十分恩返しになることがわかりました。

私と話した日のことを彼女が覚えているのか、私のことを覚えているのかはわかりません。どちらにせよ、私はまた話しかけたい。それが私にできること。ほんの小さな親切の重なり合いで、人との関係が深まるということを知ることができました。